

# 今の「在日」を考えること

——立原正秋にたどりつくまで<sup>(1)</sup>——

李 承 俊

「混血」が、一方で、社会秩序を攪乱することを象徴し、他方で、植民地主義の屈辱の徴として忌諱されるのも、この文脈においてである。

酒井直樹「レイシズム・スタディーズへの視座」  
 鵜飼哲、酒井直樹、テッサ・モーリス＝スズキ、李孝徳『レイシズム・スタディーズ序説』以文社、2012

## 1 若者と「在日」

韓国文化に関する授業では、在日朝鮮人・在日韓国人・在日コリアン、すなわち朝鮮半島が日本の植民地になってから日本に渡ってきて住むようになった、朝鮮半島にルーツを持つ人々およびその子孫のことを取り上げている（以下、「在日」とする）。教え手としての意図は、「在日」の歴史と文化を、韓国という名で呼ばれているネーション・ステートのものとして、あるいは南と北にそれぞれの国を両立させたまま緊張関係が保たれている朝鮮半島の歴史と文化として、簡単に決めつけたり位置づけたりするところがない。帝国主義と植民地支配の残滓を自らの身体をもって背負ったまま、祖国の土ではない日本という国で、祖国の人ではない日本人とともに生活を営わなければならない彼女ら・彼ら

の生そのものはいかなるものであったかに関して、たとえば関東大震災の時の朝鮮人虐殺事件を事例に紹介する。そのような出来事に巻き込まれながら生きてきた「在日」にとって、現在の生はいかなるものになっているのかに関しては、新型コロナウイルスの危機に際して、さいたま市がウイルス感染防止政策として市内の幼稚園や保育園、放課後児童クラブに備蓄マスクを配布することを決定したものの、「直接に指導監督する施設ではない」という理由で朝鮮学校を配布対象から排除したという事例を紹介する。かつて、震災という国家的な危機の時に虐殺の対象となった「在日」と、同じく新型コロナウイルスという（世界規模の）国家的な危機の時に排除の対象となった「在日」を結びつけてみることで、日本の内なる他者としての「在日」の生を直視できるような視座を学生に提供しなかった。ただし、韓国人の講師として、日本という国の残酷さや無責任さを、ひたすら日本と日本人に突きつけることを目的とするわけでもない。このような事例は、朝鮮半島にルーツを持っている人々にまつわる出来事である限り、韓国と無関係なものではない（同様の意味で北朝鮮も、である。しかし、本稿では日韓だけの問題に絞ることにする）。同時に、日本で生じている出来事である限り、日本と無関係なものでもない。このような日本と韓国というネーション・ステートの狭間に置かれた人々の剥き出しの生を見せたかった。

このような内容の授業を行った後、学生から提出された授業に対する感想文では、まるで口を揃えたかのように、〈差別〉という鍵語が引き出されていた。それははからずも、学生にとってはちょうど海外においてリアルタイムで生じた、「Black Lives Matter」というスローガンに象徴される、ジョージ・フロイドの死とそれに触発された黒人への人種差別に対する反対運動にまで想像と思考の射程が広がったようであった。「私」と違う他者を差別してはいけない、黒人に対する差別も、「在日」に対する差別も、〈私〉と何かが違うから生じてしまうのではないだろ

うか、という問題提起が学生の内部から自然に出されたわけである。

## 2 「在日」と「混血」

「在日」の存在を単に「私」とは違う他者として綺麗に峻別しようとする欲望には警戒すべきであろう。「在日」という問題は、日韓に限って言えば、日本人というネーションと韓国人というネーションの両方に関わるものである。関東大震災の朝鮮人虐殺事件とさいたま市の朝鮮学校へのマスク配布の拒否という出来事は、日本と韓国という名を持つネーション・ステートの両方に関わるものである。一国主義的な考えでは、国境線が画定する物理的なバウンダリーが、そのまま人々の想像と思考のバウンダリーとして働く場合がしばしばある。しかし、「在日」という問題が、国境線をまたがる問題として立ちあらわれるということを、〈差別〉を鍵語に自由に広がっていく学生たちの想像と思考がよくあらわしている。

「在日」という問題を、一国主義に基づく枠組みから有効にとらえることができるだろうか。あえて本稿の立場を言えば、答えは、できない、である。日本において「在日」の人権が守られ、多様なルーツが容認されることが、差別的かつ排他的な体質から抜け出して国際化された先進社会となる道につながるとする見解は、一見妥当なもののように響きながらも、「在日」という問題の射程を、日本という一国の発展と先進化に収斂<sup>(2)</sup>させてしまう恐れがある、ということを指摘することは不可能ではない。

だが、本稿は、このような指摘が可能であることを踏まえつつも、「在日」という問題を、抽象的な次元のものとしてではなく、「在日」と名指される彼女ら・彼らの生そのものをとらえなおすための視座を獲得す

るためには、いかなる道筋があり得るのかをめぐってのものである。というも、上記の日本における「在日」差別の撤廃と日本国の国際化や先進化とが結びつけられる思考は、ほかならぬ「在日」としてのアイデンティティーを有する者によるものだからである。端的に言えば、日本人としての（ナショナル）アイデンティティーを有する者によって上記のような見解が出された場合、それを批判したり突きついたりすることは容易である。けれども、「在日」が日本という国の先進化に対する提言を行うことは、自らの生が営まれている場所が、より良くなることを願うからではないかと思われる。「在日」という存在を生み出した日本の植民地支配や帝国主義の過去と過失を容赦する、などの次元の話とは多分異なるだろう。ただ、「日」に「在」る者として、日本で生きる存在として、自分の生の場所が、日本と呼ばれる国がより良くなることで、自分の生もより良くなるかもしれない、という素朴な願いのあらわれではないだろうか。自分自身の生をより良いものにしようとする人間の願望を否定することなど、誰にもできない。

いうまでもないが、「在日」は一枚岩的な存在ではない。激動の時代をくぐり抜けた1世や2世、高度経済成長の恩恵を受けた3世やその後の世代など、もはや世代論的な区分そのものが有効なのかどうかということが問われる時代が到来したと見るべきなのではないだろうか。国籍の問題、名前の問題を軸に、たとえば日本に帰化したから朝鮮半島のアイデンティティーを自ら投げ捨てたなどと言いながら「在日」ではなくて日本人だ、名前を日本式にしたから「在日」ではなくて日本人だ、など線引きすることはできないし、それは無意味である。「在日コリアン社会は急速にハイブリッド化しているのである。朝鮮半島に両親が、または母親か父親がルーツを持つコリアンのアイデンティティーも複雑である<sup>(3)</sup>」。

このような状況を、「私」日本にルーツを持つ者と、朝鮮半島にルー

ツを持つ他者としての「在日」との間の境界が、崩れつつある、両者が混ざり込みつつある、というふうに言い直すことも可能であろう。それなら、「私」と他者を綺麗に峻別できる基準など崩壊しつつあるのであり、したがって峻別の欲望と連動する形で発生する〈差別〉は、減少しつつあるのであろうか。残念ながら、そうではない。「在日」に代弁される外国人への〈差別〉を全面に打ち出しながら政治活動を展開している桜井誠や「在日特権を許さない市民の会」を支持する人々は決して少数ではない。この事実は、2020年東京都知事選挙で約17万8千票を得票した結果からしても明らかである。これを機械的に換算すると、東京都に住んでいる有権者の中で約17万8千人は、「在日」を〈差別〉してもいいという考えを持っているかそれに反対するつもりはない、ということになる。また、「在日」の母親を持つ芸能人の水原希子に対するSNS上の中傷誹謗も、決して「在日」差別と無関係とは思われない。SNSなど新しいメディアにおいて、匿名性を武器に「在日」に対する〈差別〉の言説、すなわちヘイトスピーチは、むしろSNSなどが発達する前の時代より、一層可視化されていると見ることができる。<sup>(4)</sup>

ここで、水原希子がそうであるように、「母親か父親がルーツを持つコリアンのアイデンティティー」の問題について考えてみたい。1979年9月、埼玉県上福岡市第三中学校の一年の少年が、高層マンションの屋上から投身自殺をした事件が発生した。当初は、学校内のいじめに原因が求められた（「いじめられる学校いやだ 空手着姿で飛び降り」『読売新聞』1979年9月10日）。ところで、このような捜査結果に納得できなかった両親などの調査によって、少年の自殺の背景には、「在日」に対する差別があることが明らかになった（「民族差別認め両親に謝罪文生徒の自殺で上福岡市教委」『読売新聞』1980年7月25日）。少年の父親は「在日」であるが、母親は日本人であった。いわば「ハーフ」とも呼ばれる「在日」の少年は、自分の生物学的なアイデンティティーの半

分を日本人から受け継いだのであり、しかも生まれの場所も生る場所も日本であったがために朝鮮半島の伝統や文化より日本の伝統や文化により親しみを感じていたはずである。なのに、「純日本人」の人々から差別を受けた。

「母親か父親がルーツを持つコリアンのアイデンティティー」の問題が重要な理由は、「ハーフ」「ダブル」「クォーター」などさまざまな呼び方が付与され、呼び方そのものには日本人の「私」と同じ伝統や文化や習慣など（ナショナル）アイデンティティーを決定づける因子を一定は共有・分有していることが明視されているにもかかわらず、結局「在日」における、パーフェクトで100%で純血な日本人の「私」との同質性ではなく異質性のほうが強調され重視されることで〈差別〉してもいい対象に振り回されるからである。つまり、どこまで同じなのかなど問題ではない、どこが違うのかが問題なのだ。

このような純血主義は、もしかして、「在日」という問題を想定する際にも無意識的に作動してはいなかっただろうか。「在日」の民族運動が高まりを見せていた時期に、「母親か父親がルーツを持つ」「在日」の「混血」の意味づけをめぐって展開された運動は少数派であったという。<sup>(5)</sup>

はたして、純血の「在日」と純血の「日本人」が何人いるのか、正確に数えることができるだろうか。今後、純血の「在日」と純血の「日本人」は増えるだろうか、あるいは、減るだろうか。そもそも、純血というものは存在しているのだろうか。小熊英二が「単一民族」主義ではなく「単一民族神話」とした理由は、純血同士の婚姻と出産によって生物学的に担保される「単一民族」の起源や歴史を成り立たせようとする努力など、「神話」づくりにすぎない、ということを書いたからではないだろうか。<sup>(6)</sup>

### 3 「在日」の文学と「混血」——立原正秋<sup>(7)</sup>

長老達が退場を声明したとき、私は、若手の会での雑誌発刊を提案したが、会をつなぐ中軸が〈近代文学〉という雑誌にある以上、果たして順調に運ぶかどうかの危惧はあった。なにより私達は長老達のように文学上の連帯意識を持ちあわせていなかったし、理想があったにしても、それはめいめいが異なる理想を抱いていた。しかし、今日の社会で、共通の文学理想を掲げるのは困難ではないか、ともかく出発してみることだ、と私は考えた。

立原正秋「創刊の辞」『犀』1号、1964年11月

まことに腹だたしい限りですが、ことおしなべて無性格な世に聊かなりとも鮮明な文学誌をおくろうとするためには、編集長の著名による言挙がのぞましい、という後藤明生、高井有一、三浦哲郎の発言により、このような風変りな復刊の辞を誌す次第です。だいたい、この復刊の辞は、前記三人の共同製作文を発表するはずだったのですが、彼等は当代の文殊で、三人寄っているうちに無性格な文を制作してしまい、意に言挙を編集長におしつけて逃亡してしまいました。

立原正秋「復刊の辞」『早稲田文学（第7次）』1969年1月

磯貝治良・黒古一夫編『〈在日〉文学全集』の第16巻（勉誠出版、2006）は「作品集Ⅱ」となっている。そこには、立原正秋の短編「剣ヶ崎」（1965）が収録されている。田中実による「解説」では本小説を、「日本と朝鮮の混血のもたらす罪悪・矛盾・悲劇をめぐっての物語である」とされている。

「在日」の作家である立原正秋の文学を読み解く鍵語の一つは、「混血」

である。純文学と大衆文学を自由自在に往来できる才能の持ち主でありながらも、主に大衆文学者として振る舞うことを躊躇しなかった立原には、「剣ヶ崎」や「冬のかたみに」（1975）などの純文学志向の結果として生み出された作品では、日韓の「混血」という問題が題材となっている。

立原正秋が取り上げられる際は、暗黙のルールが働いている印象を払拭することができない。それを前景化するために、あえて長々と引用文を冒頭に置いた。立原は、本多秋五や埴谷雄高など『近代文学』グループの「長老達」と話し合い、『近代文学』を批判的に継承する形で、新たな戦後文学を目指して同人誌『犀』を創刊した。また、若手作家のための「公器」たるものを目掛けて『早稲田文学』の復刊を手がけた。両誌は、古井由吉、後藤明生、高井有一、佐江衆一など、1970年前後に活躍する新人作家を世に出す役割を果たした。その背後に立原の存在感が影さしていることはいうをまたない。

立原正秋を取り巻く暗黙のルールは、朝鮮半島を出生地とし、日本に定着するために苦勞せざるを得なかった、いわゆる「在日」朝鮮人作家と位置づけた上で、その文学に投影されている「在日」としての苦勞を読み解いていかなければならない、というようなものであろう。立原の文学が、もし〈「在日」文学〉とジャンル化されるに値するものであるならば、そこには「在日」と呼ばれる人々の歴史と連動する苦悩の痕跡が散りばめられていることになる。だが、たとえば大原康恵は、朝鮮人や日本人といった、ナショナル・アイデンティティーの規定を断念することが「剣ヶ崎」に描かれていると論<sup>(8)</sup>じる。立原に対する取り上げ方を図式化すれば、一方では〈「在日」文学〉たる性質が担保された文学として取り上げ、片方では〈「在日」文学〉になりきれない性質が内在された文学として取り上げているのである。

忘れてならないのは、(こういう言い方が可能であれば、ではあるが)



純血の朝鮮人として生まれて日本に渡ってきた、つまり純血の「在日」として生きることができた立原が、自らの出自に虚構を加え、「混血」としての自画像を構築しようとした事実である。「在日」の文学の書き手たる「在日」として生きることを放棄するかのように、朝鮮人と日本人の血が混ざった「混血」として生まれた出自を自ら作り上げ、それに肉づけするような小説を書いた、立原の個人史そのものが、彼の文学が常に問題として差し出す「混血」と密接に結びついていることをいかに考えるべきか、ともいうことができる。

立原正秋の文学を、たやすく〈「在日」文学〉にしてはならない。日本人として生きること徹底し、戦後日本文学における文壇内で影響力を駆使した立原の文学的な旅程は、むしろ日本文学の流れに寄り添うものであった。かといって、立原の文学をたやすく日本文学にしてはならない。自ら努力を注いで手に得た、彼を日本人とする世間の眼差しの裏面には、ルーツの朝鮮半島との繋がりを常に意識し、それを断ち切ろうとする緊張関係が漂っているからである。

朝鮮人でありながらも日本人であると同時に、朝鮮人でもなく日本人でもない「混血」、立原正秋。

高井有一は、立原正秋がなぜあれほどまで自らの出自と経歴を、そもその純血の「在日」である自らの過去を切り捨て、日韓「混血」として作り上げようとしたかをめぐって、さまざま可能性を検証していく。<sup>(9)</sup>これに関する本格的な論考は今後の課題としつつ、ここでは、<sup>(10)</sup>2点だけ記しておく。日本の中世の美意識を起点とする立原の文学的な営為は、日本人よりも完璧な日本人になろうと努力した彼の人生が、実は完璧な日本人になることができないからこそ永遠なる努力を繰り返さなければならないものであり、したがって完璧＝純血の日本人ははたして存在するのだろうか、という根本的な問いまでつながる批評性を有するものであるということ。この批評性を文学研究につなげて考えれば、一

国主義的な枠組みと連動する純血主義的な想像と思考に支えられる〈日本文化〉を相対化するために用いられる「在日」の文学という発想の裏に、「在日」の多様なアイデンティティーを一枚岩的に決めつけようとする欲望が働いてはいないか、常に警戒すべきである。そして、「混血」という虚構の出自にこだわった彼の人生そのものが、見えない形で一国主義的な枠組みと連動する純血主義的な想像と思考を相対化させる力を有しているということ。「ハーフ」や「ダブル」としての「在日」の社会運動が活性化されない理由は、一国主義的な枠組みと連動する純血主義的な想像と思考がそのような動きを抑制しているからではないだろうか。

## 注

- (1) 本稿の一部は、国際日本文化研究センターと慶熙大学校共同主催シンポジウム「ポストコロニアル批評の最前線」（2018年8月14日、於慶熙大学校）による。
- (2) 李裕淑「世界に暮らすコリアン——その適応力とパワー」小倉紀蔵編『現代韓国を学ぶ』有斐閣、2012、p. 321。
- (3) 注(1)の文献、p. 316。
- (4) 1990年代以後、新たなメディアの発展とともに多様な様相を呈しながら展開される「在日」への中傷誹謗やヘイトスピーチに関しては、伊藤昌亮『ネット右派の歴史社会学——アンダーグラウンド平成史 1990-2000年代』青弓社、2019、が参考になる。
- (5) 下地ローレンス吉孝『「混血」と「日本人」——ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』青土社、2018、pp.168-170。本書の著者の名前を見てほしい。一国主義と連動する民族主義が蔓延する際、本書の著者の生そのものが危機に晒されかねない立場であることを、読者は見逃すべきではない。
- (6) 小熊英二『単一民族神話の起源——〈日本人〉の自画像の系譜』新曜社、1995。
- (7) 本稿は、「在日」の人々による文学を特定のジャンルとして取り扱ったり、

また特定のものとしてカテゴライズするものではない。

- (8) 大原泰恵 「「剣ヶ崎」——断念と美意識」 武田勝彦編 『立原正秋 人と文学』 創林社、1981。
- (9) 本格的に立原正秋の出自における虚構性が論じられるようになるのは、武田勝彦 「立原正秋の二つの私——〈公けの私〉と〈内なる私〉」 (『新潮』 1985年9月) からである。
- (10) 高井有一 『立原正秋』 新潮社、1991。